

病気の確定診断に欠かせない病理検査

北村 成大（病理部長）

病理医は患者様と直接お会いすることはありませんが、正しい診断と適切な治療を行う為に大切な役割を持っています。

たとえば“胃のもたれ”があって当院を受診されたとします。最初に外来で診察を受け、更に胃部内視鏡検査で精査が必要となった場合に病理医との関わりが始まります。内視鏡で胃の中に何らかの異常所見を見つけた時に、胃の組織をほんの少し（マッチの頭程度）摘み取ってきます。その小さな組織から厚さ3 μ m(3/1000mm)程の標本作製し、顕微鏡で覗いて良性の病変かあるいは胃癌かを判断するのが病理医の役目なのです。

術中迅速診断

もし癌であれば手術で病巣を摘出することになりますが、ここでも病理医が関与してきます。ひとつは手術中に外科医が切除範囲の最終決定をする為に行う「術中迅速診断」です。これは切除断端に悪性細胞の残存がない事を病理医が確認する検査で、断端の組織を-80℃で凍らせて薄く切り、顕微鏡で調べます。この為に「術中 Frozen(凍結)診断」とも云われています。

もうひとつは摘出された組織から数十の標本



手術中に取ってきた組織を
-80℃で凍結させ、薄切する

を作製して顕微鏡で検鏡し、病変の悪性度や進行度を最終的に診断する「病理組織診断」です。この結果によって術後の治療の

方針が決定されます。

「病理組織診断」は大きな手術だけでなく、当院で行われる全ての生検組織や小手術で切除された組織に対しても



固定した組織を薄切する技師

行われていますし、病変の良悪性の判断だけでなく、その病変の本態についても報告書が作成されています。

細胞診と病理解剖

病理医にはこの「病理組織診断」の他にも2つの大きな役割があります。1つは「細胞診」で、喀痰や尿等をスライドガラスに直接塗布し、顕微鏡で悪性細胞の有無を調べるものです。癌検診の目的で広く行われている検査であり、当院でもドックや各科外来で頻繁に行われています。

もう1つは、ご遺族の同意のうえで実施される「病理解剖」で、死因の検索や、生前の病態評価の正否を明らかにするために行われます。

以上の「病理組織診断」「細胞診」「病理解剖」が病理医の仕事です。患者様にお会いする機会はありませんが、病院内での病理医の役割について多少はご理解頂けたらと思います。



組織標本を顕微鏡で
判定する北村部長